

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

1

Vol.46 No.1 JANUARY

2023

サブスペシャリティを 極める学修

小児看護の実践力を高めるために

新連載

離島で釣りして、看護して
離島看護の一日

学んで驚く！子どもの応急手当
応急手当の指導、
困っていませんか？



へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第20回 「謎」の研究

皆さん、ミステリーはお好きだろうか。衝撃的な出来事が起こりそうな予兆。謎だらけの現場。関係者を集めて、「これから解決編が始まるぞ」と探偵の謎解きに胸を躍らせる場面。ミステリーが好きなら、実は研究論文も好きになれる。そういうと学生さんは驚くかもしれない。

ミステリーは、何はなくとも、謎が読者を最後まで牽引していく。魅力的な謎が大事なのだ。しかも、大きくて、不可解な謎ほど人々はその真相を知りたいと思う。真相がパズルのピースのように綺麗に合わさると、大きなカタルシスと爽快感が得られる。

私は、小児がんの子どもたちの心理外来をしている。知能検査で問題がないのに、学校でうまくいかない子どもたちが訪れる。ほかの施設では、「親の心配しすぎだろう」や「知能検査で問題がないので大丈夫です」と言われてきたらしい。私にはそれが「謎」だったのである。知能検査が検出していない、別の問題があると推理したのだ。

謎解きの手がかりになるのは、伏線である。伏線がなければ、推理できないからだ。「伏線を張る」とは、解決の根拠や手がかりとなる事実や出来事を事前に提示しておくことを指す。研究論文でも、冒頭に犯人になりそうな変数をずらりと並べておく。ここに先行研

究が効いてくる。そして変数を組み立てて、仮説をあらかじめ示しておく。

ミステリーでも、何の根拠もなしに犯人は特定できない。さらに、終盤にいきなり新しい人物が登場して「私が犯人です」と告白を始めても、読者からはブーイングの嵐であろう。やはり、論文もミステリーも、イントロダクションで怪しい変数は全員紹介しておく必要がある。

研究でも同じように、私は知的な能力のパターンから、環境をどのように調整すれば、本人が能力を発揮しやすくなるか、という小児がんの子どもたちが直面する困難の論理的解決を試みたいのである。

といっても、得られた結果の解釈は無限に存在してしまうため、冒頭で仮説を示しておかないと、ここで苦しんでしまう。論文を読んでいるときは、あまり意識しないかもしれないが、書き手に回ると、膨大な説明の中から「解釈を限定する」というのは、実は大変な作業だと気づかされる。

看護でも心理でもデータに基づいて、丁寧に推論を重ねていけば、患者さんを助ける方法を見つけ出すことができる。臨床経験があるなら、なおさら説得力のある仮説や推論を立てやすいだろう。研究の手がかりは、臨床現場にたくさん落ちているのだから。

佐藤聡美

さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)受賞。